

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-25

編集後記

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

140

(終了ページ / End Page)

140

(発行年 / Year)

1981-02-04

△編集後記▽

この稿を書いているいまは師走だが、雑誌が出るのは四年生の卒業直前である。「あろう」などとあいまいな言い方をするのは、メ切りを二旬ほど過ぎてはまだ届かない原稿があるからだ、欲しい原稿なので、タイム・リミットを勝手に引きのびしながらなお期待をもちつづけているのである。さる高名な僧が、「悟る」とは決意することだと教えてくれたが、凡俗の悲しさで「悟る」ことができない。むろん、編集者としては失格で、営業誌であったなら、私はたちどころにクビである。商業誌なら確実にもらえる原稿も、こういう学術雑誌では、とれるものもとれないという意外な現実にぶつかって、いささかとまどいを感じているわけだが、出版社にかかわりをもつことがアダとなり、タカをくくっていた身を深く反省している。もっとも、非営利誌の編集者として大きな教訓を得たので、その意味では感謝している。

そこで早速その教訓だが、次回からは、予定の倍ぐらい原稿を依頼し、メ切り間に合わないものは見切って発車することにす。

また、編集スタッフに、各自一篇ずつの予備原稿を義務づけるという手も考える。他にも決め手はあるが、それはここに書かない。書けばたちまち無効になるからだ。

さて、本号だが、片岡良一教授の著作集刊行記念講演会のテープをおこして再出発を飾ることができた。会外原稿を載せることはめったにないだろうからぜひ熟読してほしい。稲垣氏、安田氏にあらためて御礼を申しあげる。つぎに、西尾実教授・重友毅教授の追悼文を、ゆかりある先生や教えを受けた人たちの中から、編集部の人選で執筆していただいた。原稿をもらえないことでは定評のある益田先生から、予定枚数をはるかに越える分量をいただけただけなのは感謝の言葉もない。

なお、追悼文については、書かせてもらいたかったという不満があるかもしれない。正直に言って私にもそういう経験がある。私は片岡先生の時も、近藤先生の時も、どこからも執筆は依頼されなかった。「大学人」ならぬ出版社の人間や、法政のライバルのような他の大学の教壇に立つような徒輩には書かせないという意図があったとは思わないが、師を憶うその気持は私にもよくわかる。だが、その心人後におちないのなら、ぜひ一篇の論

文を追悼文のかわりに書いてほしい。師への追悼とはそういうことでなければならぬ。なお、この号には、昭和初期卒業の二人の大先輩の論考をいただいた。ともに現代俳句にかかわるものだが、反響を呼ぶにちがいないと確信している。

大胆で意欲的な若い人の論文がほしい。誌面の90%を若い人の原稿で埋めるのが編集の方針である。

(高崎隆治)

一九八一年二月四日	発行
日本文学誌要 第二四号	
編集人	高崎隆治
発行人	西田勝
発所	東京都千代田区富士見二ノ一七法政大学大学院内 法政大学国文学会 電話〇三(264)九四〇八
印刷所	図書印刷株式会社 東京都港区三田五ノ二一